

第六十八回

瀬戸市文芸発表会

特選作品

お断り
短歌 一般の部
大塚寅彦先生選 第二席
二重投稿のため取り消します

俳句

【田口 風子 先生選】

《一般の部》

紙風船白寿の母に膨らます

万緑や小さな駅に授乳室

よき方へはづれし予報秋日和

《小中学生の部》

ふたごの子見ると幸せさくらんぼ

あじさいにきらめく水はビーズのよう

どこからか真っ赤なトマトかじる音

【佐藤 美恵子 先生選】

《一般の部》

窯出しの壺の胴張り緑さす

春の泥人は火星に降りたつか

極寒の大河に浮かぶ缶ひとつ

《小中学生の部》

入学式隣の席の知らない子

一枚のもみじ取ろうと背伸びする

ぬか床を母に任されきゆうり漬け

瀬戸市東横山町

瀬戸市南東町

愛知県春日井市

聖霊中学校三年

静岡市立清水第二中学校二年

聖霊中学校三年

小柳津 民子

栗木 かず

西村 青夏

白井 心虹

白木 理絵

田中 木綿

瀬戸市東本地町

埼玉県入間市

奈良県宇陀市

幡山中学校一年

各務原市立陵南小学校五年

セントヨゼフ中学校一年

稲垣 松鯉

大野 美波

渡辺 勇三

澤田 和貴

中本 菜々美

宮口 真緒

俳句

【加藤 かな文 先生選】

《一般の部》

春疾風丸も四角も転がって
春の泥人は火星に降りたつか
天皇の車列の過ぐる夏木立

《小中学生の部》

自転車で帽子がフつとなつのかぜ
夜の川天然の電気ホタルたち
雨空にまるであじさい子供傘

【横田 欣子 先生選】

《一般の部》

病との戦い了えて初つばめ
涼しさや魚鼓に刻んだ修行跡
命いま三千グラム風光る

《小中学生の部》

ふたごの子見ると幸せさくらんぼ
ワイパーがわか葉をなでなでしているよ
春風が田んぼの水を沸かしてく

瀬戸市上之山町

埼玉県入間市

愛知県尾張旭市

聖霊中学校三年

静岡市立清水第二中学校一年

静岡市立清水第二中学校二年

伊藤 真由美

大野 美波

六角 久世

稲垣 葵

大竹 布実乃

杉山 春菜

愛知県春日井市

瀬戸市三沢町

奈良県奈良市

聖霊中学校三年

尾張旭市立東栄小学校三年

セントヨゼフ中学校一年

大嶋 裕子

高木 正勝

和田 康

白井 心虹

廣瀬 心花

宮口 真緒

短歌

【大塚 寅彦 先生選】

《一般の部》

夏の宵父母に灯せる和蠟燭在りし日思い炎見つむる
運動場に朝礼台の脚が生えそのまた上に校長が生える

《小中学生の部》

大チャンス目のがさなかったストリート最後の夏に初ホームラン
たそがれに静かにゆれる波打ちぎわ行つては帰るまるで人生
一年の思い出一緒に流れゆく桜の花びら眺める私

【近田 順子 先生選】

《一般の部》

「めでたし」と昔話の最後だけ覚えて欲しい子等に幸あれ
働き方改革生き方改革ぼくは静かに暮らしたいだけ
薔薇園の薔薇の名前を読み行けば悲劇の女続く夕暮れ

《小中学生の部》

一年の思い出一緒に流れゆく桜の花びら眺める私
ありよりも働き者のママ様は心も顔も光り輝く
沈黙に幸せ運ぶあいの風親子喧嘩も過ぎ去っていく

瀬戸市原山町 岩間 豊喜
名古屋市瑞穂区 清水 良郎

静岡市立清水第二中学校二年 佐藤 颯海
静岡市立清水第二中学校二年 杉山 春菜
水野中学校二年 中尾 桜子

三重県桑名市 小林 寛久
宮城県仙台市 月波与生
瀬戸市神川町 丸山 進

水野中学校二年 中尾 桜子
セントヨゼフ中学校一年 宮口 真緒
静岡市立清水第二中学校二年 山下 海咲

【松代 天鬼 先生選】

《一般の部》

駅出ると陶製時計瀬戸の声
上限のない幸福という魔物
晩学へゆっくり潮が満ちてくる

《小中学生の部》

一人だと自由だけれどさびしいな
窓ごしにってるぼうず外を見る
ひょうきんな友のダンスに笑いこけ

【なかはら れいこ 先生選】

《一般の部》

紙になるまでは季節を語ってた
高橋の豆腐十円皿持って
しりとり途中が雨で濡れている

《小中学生の部》

ふきのとうあさ日をあびてあくびする
ビルの中歩くと恋しい瀬戸の町
非常袋ないしよで入れたぬいぐるみ

瀬戸市五位塚町

愛知県豊橋市

愛知県尾張旭市

豊田市立前山小学校四年

品野中学校一年

名古屋市立平田小学校四年

京都府京都市

瀬戸市菖山台

瀬戸市神川町

效範小学校四年

品野中学校三年

名古屋市立中小田井小学校六年

稲垣 康江

河合 正秋

河合 守

掛樋 枉人

加藤 栞

細江 杏愛

福村 まこと

松長 一步

丸山 進

伊藤 慶史朗

寺島 依知

村山 月乃

詩

【若山 紀子 先生選】

《一般の部》

夏の記憶

夏の記憶が逃げていく
陽炎の中に見た 白日夢

捕虫網を宙にあげ
セミの姿を追って
迷い込んでしまった
コンクリートジャングル

埼玉県春日部市 宇田川 直孝

友達がみーんな
田舎へ帰ってしまった夏休み
だーれもない街中で
ひまわりの花飾りを付けた
麦わら帽子の女の子を見た
記憶さえも

九十歳になったら

佐賀県唐津市

古賀 由美子

九十歳になったら

九十歳の気持ちが変わるだろうか

母は自分を九十歳とは認めない

いまだ現役だし

野望だって抱いてる

体はきかなくなっているのに

いつも怒りのエネルギーにあふれ口も達者

母の知人は私を見ると

「あら妹さん？」とたずねる

(違います↓心の声)

父はもう充分生きたと思っているようだ

好きだった本も読まなくなった

意欲もなく一日中ほとんど寝ている

それでも大好きな演歌だけは
子守唄で聞いている

いつも静かで穏やかで父とは話しが合う

でも一緒に行った病院で

「奥様ですか」とたずねられた

(違います↓心の声)

私は父に似ていると思う

まだ六十代だけど意欲も好奇心もない

九十歳までは生きなくてもいいかなあ

《小中学生の部》

おにごっこ

西宮市立南甲子園小学校二年 あけみ

おにごっこしよう

わたしがおにになるね

10びよう数えるよ

もういいかい？

どこにかくれたの？

木の上かな

それともはっぱのうら？

花の中かな

ひらひらとんできようはどこにかくれたの？

青い羽見つけたよ

まってまって

よし、つかまえたぞ

やったー

もうかえるじかんだね

またあそぼうね

バイバイ

アオスジアゲハさん、またあした

じいじのたいやき

西宮市立南甲子園小学校四年

たかこ

じいじはいつも

たいやきを持って遊びに来てくれる

あまくてあんこがたくさん入ったたいやきが

わたしは大すきだ

でも仕事がいそがしくて

来られないことがあった

わたしはじいじに電話をかけた

「じいじ、次はいつ来る？」

「来週にはたいやき持って行くから」

じいじは笑って言った

わたしは

「じいじが来てくれるだけでいいんだよ」と言いたかった

でもはずかしくて言えない

だから手紙を書くことにした

「じいじへ

いつもたいやきありがとう

じいじのこと大すきだよ」

次の週、じいじはいつもよりも多く

たいやきを持って遊びに来てくれた

わたしは手紙をわたして

じいじとならんでたいやきを食べた

たいやきはいつもよりもあまくて

とってもおいしかった